

構築会
2003
だより 

構築会だより

目 次

会長挨拶	3
前田 孝男 (A67)	
構築会会則	4
構築会役員一覧	6
支部役員一覧	7
専攻だより	8
土木工学専攻：西村 宣男	
建築工学専攻：柏原 士郎	
教職員構成	10
伊藤克三先生を偲んで	12
廣口 征男 (A67) 佐藤 隆二 (A69)	
名誉教授の先生からのおたより	16
伊藤 富雄 楢木 亨	
脇山 廣三 森 康男	
特集「産官学連携によるパートナーシップの構築	
—関西の都市再生にかかる大阪大学構築会の役割—	21
畠山 庄司 (C70) 渡部 久仁雄 (A76)	
水野 成容 (A84)	
卒業生だより	25
50周年：高野 浩二 (C53)	
40周年：坂本 成彦 (C63) 中江 新太郎 (A63)	
30周年：木村 修治 (A73)	
20周年：丁野 成人 (A83)	
10周年：大西 弘志 (C93)	
支部だより	32
愛知支部：降幡 達生 (C83)	
大阪支部：芦原 栄治 (C76)	
東京支部：大田 哲也 (C83)	
兵庫支部：本井 敏雄 (C75)	
広島支部：増田 伊知郎 (C80)	
2003年度役員会報告	37
2003年度総会報告	38
事務局だより	40
会員動静	43
業界案内	70

頃 会 ご 挨 捶



構築会会長 前田 孝男 (A67)

構築会会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

この度総会で会長に就任させて頂きました。この一年間、皆様方とのお話しを大切に、構築会の発展のため出来る限り努力したいと思います。どうかよろしくお願ひします。

私は3年前まで都市基盤整備公団に勤務し、関西・名古屋・東京の3都市において街づくり・すまいづくりを中心に仕事をしてきました。現在は大阪で、郊外ニュータウンの商業施設・市街地再開発事業の住宅・施設の管理並びに調査研究業務等に従事しております。

さて、今年の構築会だよりのテーマですが、昨年の「変革の世紀にどう前向きに対応するか」に引き続き、「産・官・学連携によるパートナーシップの構築」—関西の都市再生にかかる大阪大学構築会の役割—とさせて頂きました。日頃、産・官・学連携によるパートナーシップについて考えていることを述べさせて頂き、就任のご挨拶とさせて頂きます。

高度経済成長期が終焉し、持続可能な社会への転換が求められる一方、グローバル化が進み、人の価値観も多様化するなかで、人・物・資本の面で東京一極集中がさらに進む時代となっています。東京では、すでに首都として世界の都市と競争する中で産・官・学の連携が進んでいます。関西がこのような時代に、日本の一地方都市として都市間競争に打ち勝ち、国際観光都市・集客都市として生まれ変わるために、脱工業化社会即ち知価社会に脱皮する必要があると言われています。

このような知価社会と言われる変革期には、関西の大学が核となり、その叡智を集結し、情報産業等の民、並びに政策を立案・施行する官とのパートナーシップを確立するとともにそのマネジメントを担う必要があると思います。構築会としても、特に大阪の都市再生戦略について議論し、目標・優先順位を提言する時期に来ていると思われます。皆様方は、河川・道路・交通・都市計画等土木・建築の専門家で申し上げるまでもありませんが、車社会の都市から、人間中心の国際交流都市・環境共生都市・誰もが生活できるノーマライゼーションの都市に「リユース」「リニューアル」「ミックスドユース(商業と居住の共存)」しながら、大阪の社会基盤を造り直す仕事が残されていると思います。昔大阪市から転出した市民がもう一度戻れるような都心居住の政策と併せて推進すれば、時間的余裕が生まれ、文化・商業活動・NPO活動も活性化するのではないかでしょうか。

パリのように歴史も大切に、「安全で、安心して住める街」「水と緑の美しい街」、水都・大阪に生まれ変われば、世界の姉妹都市との交流もさらに進むことでしょう。

このような都市経営に関して、大阪大学関係者が「知」のリーダーとしてイニシアチブを執り、産・官・学とパートナーシップを構築すれば、「未来都市関西・大阪の今後の社会基盤整備とは何か」について提言できるのではないかでしょうか。

昨秋、米国シアトル市、オレゴン州ポートランド市、アイダホ州ボイジー市を訪問して、商業施設の活性化という視点から見た感想ですが、シアトル市内の公園を繋ぐ緑道など緑のリング構想、ポートランド市のパーク＆ライド、ライトレール(路面電車)によるトライメット等の交通計画、ボイジー市の街角アートデザイン(彫刻)計画等の都市再生戦略を持てば、環境にやさしく、人にやさしい、誰もがショッピングを楽しめる、絵になる美しい街づくりができると思いました。

私も、京都リサーチパークように世界に情報発信する産・官・学連携の街・大阪、またコンベンションの開催できる街・大阪に変えるネットワークの一員に参画できればと願っています。

最後になりましたが、構築会会員の皆様方のご多幸とご健勝をお祈りしてご挨拶とさせていただきます。

構築会規則

平成15年5月20日 改正

総 則

- 第1条 この会は構築会という。
- 第2条 この会は会員の親睦を計ることを目的とする。
- 第3条 この会は事務局を大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻あるいは建築工学専攻のいずれかに置く。
- 第4条 必要なときは役員会の議決によりこの会の地区支部、職場部会を設けることができる。

会 員

- 第5条 この会の会員は大阪大学工学部構築工学科、土木工学科、建築工学科、地球総合工学科の土木工学科目ならびに建築工学科目、大学院工学研究科構築工学専攻、土木工学専攻ならびに建築工学専攻の現旧教官、卒業生、学生および役員会の議決によって入会を認められた者とする。
- 第6条 この会の会員に次の3つの種別を設ける。
- (1) 正会員：卒業生、教官。
 - (2) 特別会員：名誉教授、元教官、非常勤講師、元非常勤講師および役員会の議決によって入会を認められた者。
 - (3) 学生会員：学部学生および上1号に該当しない大学院生。

役 員

- 第7条 この会に会長1名、副会長1名、幹事長1名、監事2名、委員若干名、幹事若干名の役員を置く。
- 会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐し職務を代行する。
- 幹事長は会長を補佐し幹事団を総理する。監事はこの会の会計を監査する。
- 委員は会務を評議する。幹事は会務を処理する。
- 第8条 会長および副会長は正会員の中より役員が推薦する。
- 幹事長は土木工学専攻および建築工学専攻の教授、助教授、講師のうちから互選する。
- 委員は各卒業年次から2名ずつ、各支部から1名ずつ互選する。
- 監事は委員のうちから互選する。幹事は土木工学専攻および建築工学専攻の教官から選出する。

- 第9条 役員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

東 一 員 労 会 業 務

役員会・総 会

- 第10条 役員会は会長、副会長、幹事長、委員および幹事によって構成され、年1回これを開く。
但し、会長が必要と認めたときは隨時これを召集することができる。
- 第11条 会長は必要に応じて総会を開く。

会 計

- 第12条 この会の費用は会費および寄付金その他をあてる。会費の変更は役員会の議決によってこれを定める。
- 第13条 会費は1ヶ年、正会員3,000円とする。ただし、他大学を含めた大学院在学中の正会員は半額とする。
また、卒業45周年を迎えた会員は、会費を滞納していない限り卒業46年目以降の会費を免除する。
- 第14条 この会の会計は監事が監査し、その承認をえて役員会でこれを報告する。

事 業

- 第15条 幹事団は次の各号の事業を行う。
- (1) 会員名簿の刊行と配布。
 - (2) 講演会、見学会などの開催。
 - (3) その他の行事。
- 第16条 会員が叙位、叙勲などの栄に浴した場合、会長より祝電を打つことができる。
- 第17条 会員が弔事の際は、次の各号による。
- (1) 正会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、檻または盛花一対を呈する。
 - (2) 特別会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、檻または盛花一対を呈することができる。
 - (3) 学生会員が逝去の場合は会長より弔電を打つことができる。

会 則 の 変 更

- 第18条 この会の会則の変更は役員会の議決によってこれを定め会員へ報告する。
- 付 則 この会則は平成15年5月20日より実施する。

構築会役員一覧

会長 前田 孝男 (A67)

副会長 小嶋 清伍 (C70)

監事 山内 一浩 (C86)

幹事長 飯田 克弘 (C教)

幹事 向井 洋一 (A91)

会務・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録

会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録

会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録

会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録
会員登録・会員登録

学年委員

	【土木】	【建築】	【土木】	【建築】
1950			1977	蓮 輪 賢 治
1951	木田 五一郎	伊藤 俊夫	1978	後野 正雄
1952	竹山 喬	木村 康彦	1979	正田 一明
1953	高野 浩	大久保 昌一	1980	辰谷 義也
1953	濱宏	片倉 健	1981	戸上 拓哉
1954	松山 巍	杉原 昭	1982	磯山 正建
1955	堤道	荒木 兵一郎	1983	辺田 昌
1956	波田 凱	山田 俊満	1984	藤田 宏
1957	広内 徹	秦洋一郎	1985	玉山 浩好
1958	島良	脇広三	1986	井内 宏
1959	島根善	金田 宏	1987	藤島 和
1960	小島敦	藤井 一	1988	島野 康正
1961	村上昇	塚象	1989	星村 益
1962	木通	入江	1990	小野 加上
1963	松井保	森田 新太郎	1991	大西 村
1964	濱田圭	島晴 美	1992	神木 潔
1965	島田壯	小島 孜	1993	田中 志
1966	宇野剛	市嶋 久	1994	荒木 歩
1967	川正	竹嶋 祥	1995	松本 忠
1968	谷口靖	香喜	1996	山本 平
1969	武内一	大津 俊	1997	内村 充
1970	阿部信	木林 長	1998	木下 公一郎
1971	伊藤伸	角田 彰	1999	田村 美範
1972	木村正	森田 孝	2000	内橋 美則
1973	森永勝	木村 修	2001	橋本 直樹
1974	青木利	巽昭	2002	竹口 武志
1975	秋山寿	家泉 克彦	2003	蒲原 基
1976	芦原栄	倉木 克彦		

支 部 役 員 一 覧

土木工学会の歴史

愛知支部 支部長 英比勝正 (C72)

(C60) 岩宣替西英典樹 副支部長 安原良一 (C71)

幹事長 降幡達生 (C83)

大阪支部 支部長 辻征雄 (C65)

副支部長 河上隆志 (A69)

副支部長 野口恵司 (C71)

幹事長 辰谷義明 (C80)

東京支部 支部長 柴田陽一 (C66)

副支部長 中村康一 (A71)

幹事長 井澤衛 (CM79)

兵庫支部 支部長 入江恂一 (A62)

副支部長 岸田威 (C66)

幹事長 本井敏雄 (C75)

広島支部 支部長 江草拓 (C63)

副支部長 中山隆弘 (C68)

幹事長 加地健一 (C71)

土木工学専攻の近況

専攻長 西 村 宣 男 (C65)

昨今、我が国は社会的・経済的に極めて厳しい状態に置かれているように思われる。第二次大戦後の大混乱の時代でも将来に明かりが見えていて、努力がやがて報われると信じて復興に努めていたように記憶している。それに比べて現在のこの閉塞感はどうなっているのだろうか。若い人に努力を強いても、その努力に相応しい展開を確約できない社会になってしまっている。戦後のように先進諸国に追いつき追い越すと言う国家レベルの目標が明瞭な時代と、この先の国家としての目標が不明確な現在との差違が混沌の原因の一つとして挙げられると感じている。

このような状況にあっても、大学は社会の要求する人材の育成と研究成果の向上に努めなければならない。平成16年から開始する国立大学法人化が国立大学における教育と研究体制の飛躍的発展に対する起爆剤となるよう努めなければならない。

平成15年度の土木教室の教官人事は、趙勇相君が地盤工学領域の助手として採用されたのみで至って平穏である。次年度より教授の退官が続き、新教授の選考とそれに伴って助教授以下の人事が活発になると予想される。教官数の削減に対処するには一騎当千の人材を集めなければならない。今は嵐の前の静けさと言った感がある。

最近の土木工学専攻・土木工学科目の特徴は女子学生の増加である。現在在籍する女子学生は博士後期課程2名、博士前期課程2名、学部4年4名、同3年5名、同2年9名(1年生の配属決定は来年3月)となっている。女子学生の就職は社会の受け入れ体制の制約があるが、地方公務員、コンサルタントで頑張っている。もう少し広い職種で受け入れ態勢を整えて頂きたいと考えている。

就職に関しては、ここ数年採用側の募集方式が様変わりしてきており、従来の学校推薦による採用が減少している。卒業生の総数が少ないせいで就職難と言った事態には到っていないが、指定校に安住していた時代とは異なり一般校の学生と横一線で評価されるので、学力だけでなく人間性をも評価されるよう面接の技術等も指導することも必要となっている。

いずれにせよ土木教室の教官と学生は絶えず評価に晒される時代になっている。教室の構成員は一丸となって様々な視点から良い評価が得られるように努力しなければならない。

建築工学専攻の近況

専攻長 柏原士郎 (A66)

今年は、現在の国立大学としての最終年で、大学史にも残る重要な節目の年でありました。1872年の学制公布、大戦直後の教育改革に次ぐ大改革として来年(2004年)4月からは国立大学は独立行政法人化致します。これに伴い、私たちの分野も学科・専攻再編など大いに揺れ動いております。来年度のこのたよりでは、その結果についてご報告されると思いますが、取りあえずは、建築工学専攻のこの1年間の近況をご報告申上げます。

はじめに、名誉教授の伊藤克三先生が本年3月9日、肺炎のためご逝去されました。環境工学の分野で幾多の輝かしいご業績を残され、また温厚誠実なお人柄でご指導いただきましたお姿を思い起こし、誠に悔やまれる次第です。謹んで心よりお悔やみ申し上げます。

専攻内の人事をご報告致します。2003年3月に山本勲技官が定年退職されました。4月には相良和伸先生が三重大学から建築・都市環境工学領域の担当教授として着任されました。

学生につきましては、学生数は大学院生まで含めると総数272名、その内36名が外国人留学生です。企業に所属しながら入学している、いわゆる社会人博士後期課程の学生は4名、研究生が6名在籍しています。約100名が大学院生で学部生よりも多く、その三分の一が留学生ということになります。私が大学院に在籍していた三十六、七年前には、大学院生は10名程度、留学生は一、二名で、隔世の感があります。国際化が益々進んでおります。出身国も、中国(14)、韓国(13)、ラオス(4)、ハンガリー(2)、カンボジア(1)、チュニジア(1)、ウルグアイ(1)と多様であります。

学生の進路ですが、今年度は他大学、本学の他専攻の志望者も含め41名が大学院博士前期課程への受験を希望しています。後期課程への希望者は1名です。

就職状況は近年の社会情勢を反映して厳しい状況にあります。しかし、先輩諸氏のご活躍ならびにご尽力のおかげで、今年も7月現在公務員希望者を除きほぼ全員内定をいただいております。その内訳はゼネコン9名、住宅産業3名、設計事務所3名、その他10名です。

就職の厳しさと同時に、今後の少子化を考えますと、入学時にいかにして優れた学生を確保するかも重要な課題となっております。そのために、大学、学部、各研究室それぞれのホームページの充実、大学見学会の開催、予備校へ出向いての説明会、教官の出身校での説明会など、一昔前には考えもしなかった広報活動に特に力を入れております。説明者は高校生に親しみのある若い教官とすること、なるべく綺麗なところを案内コースとすることなどきめ細かな配慮もしております。高校生にとって魅力ある大学であるためには、教育内容の充実とともに、施設の充実も重要です。老朽化した建物の建て替えは認められませんが、耐震補強も含め建物のリニューアルを民間の力を活用するPFI方式で実施することが検討されています。

国立大学の独立行政法人化は、研究、教育共に大きな問題を孕んでおりますが、決定した以上は様々な問題をなんとかしてクリアし、この機会を将来の発展に繋げる契機にすべきだと考えております。

今後とも皆様方のご助言、ご提案、ご支援等よろしくお願ひ申しあげます。

教職員構成

土木工学専攻

水システム工学領域

内線

教授 中辻 啓二 ※7603

社会基盤設計学領域

内線

助教授 西田 修三 ※7606

教授 松井 繁之 ※7619

助手 川崎 浩司 3539

助教授 大倉 一郎 ※7620

教務員 中村 俊和 ※7605

助手 大西 弘志 ※7618

交通システム学領域

構造工学領域

教授 新田 保次 ※7608

教授 西村 宣男 ※7600

助教授 飯田 克弘 ※7611

助教授 小野 潔 ※7598

助手 松村 暢彦 ※7610

助手 亀井 義典 ※7599

事務補佐員 赤松 節子 ※7609

事務補佐員 楠木 晴美 ※7600

事務補佐員 松橋 加寿江 ※7599

建築工学専攻

地盤工学領域

建築力学領域

教授 松井 保 ※7623

教授 橋 英三郎 ※7631

助教授 阿部 信晴 ※7624

助教授 馬場 研介 ※7633

学内講師 小田 和広 ※7626

講師 向井 洋一 ※7634

学内講師 鍋島 康之 ※7625

教務補佐員 馬 華 ※7634

助手 趙 勇相 ※3516

事務補佐員 竹崎 郁 ※7623

建築構造計画学領域

国土開発保全工学領域

教授 大野 義照 ※7635

教授 出口 一郎 ※7613

助教授 中塚 信 ※7636

助手 荒木 進歩 ※7614

学内講師 岸本 一藏 ※7637

技官 一宮 孝信 3514

助手 中川 隆夫 ※7637

事務補佐員 西 美智子 3526

教職員構成

建築構造システム学領域

内線

教授 甲津功夫 ※7632
助教授 多田元英 ※7652
学内講師 乗原進 ※7653
技官 松井貴志 ※7653

建築・都市形態工学領域

内線

教授 吉田勝行 ※7655

土木・建築共通

建築・都市計画論領域

図書室・事務室

教授 舟橋國男 ※7639
助教授 鈴木毅 ※7641
助教授 木多道宏 ※7640
助手 李斌 ※7640
技官 川端修 3528
事務補佐員 松原茂樹 3528

大坂和代 ※4220

新庄由香 3518

中原勝治 ※7628

川端修 ※4220

建築・都市人間工学領域

教授 柏原士郎 ※7647
助教授 吉村英祐 ※7648
助教授 横田隆司 ※7649
助手 飯田匡 ※7649
事務補佐員 佐野こずえ ※7650
事務補佐員 繩稚美穂子 ※7655

大坂和代 ※4220

新庄由香 3518

中原勝治 ※7628

川端修 ※4220

建築・都市環境工学領域

教授 相良和伸 ※7643
助教授 山中俊夫 ※7644
助手 甲谷寿史 ※7645
事務補佐員 木村有佐 ※7645 (※はダイヤルイン 06-6879-0000)

伊藤克三先生を偲んで

伊藤克三先生を偲んで

記念誌編集委員会

内閣官房・文部省

内閣官房

内閣官房・文部省

廣口征男 (A67)

建築の四講座では毎年『忘年会』ならぬ『望年会』を関係者全員に案内して、泊まり掛けで実施することが、いつの間にか年末恒例の大イベントになっています。

かれこれもう30年余り途切れることなく続いている、卒業生とこれから実社会に巣立っていく現役との、しっかりとしたファミリー雰囲気のコミュニケーションの場として定着しているのであります。

『望年会』の名付け親は勿論、人一倍未来志向の強い伊藤先生その人であります。



N音が微妙に鼻に抜ける先生独特の言い回しが、今にも聞こえてきそうであります。

「皆さん、一年の回想だけで年を忘れてしまうためだけの忘年会では、ちいともおもろいことおませんやろ。やっぱり来る年に懸ける胸いっぱいの希望を抱いて集まってこそ、年末の忙しい時期に皆で寄り合うことの意味があると思うんですわ。薔薇作りもネ、これと一緒にすわナ・・・」

これから先は先生の独壇場になりますので割愛ですが、教職に奉ずる者としての伊藤先生の愛弟子一人一人に注がれる深い人間愛、学問の領域を遥かに超越した哲学的な慈愛の深さが、言葉ひとつ思い出であっても、それは私たち愚弟子たちの心の中で、年を経た薔薇の古株のように大きな存在となって生き続けているのであります。

伊藤先生といえば「薔薇」、薔薇といえば純白の「ビルゴ」、1981に出版された先生の大坂大学教授退官記念誌『ビルゴ礼讃』は実行委員長であった五十嵐先生も仰っていますが、名実ともに珠玉の名編として忘れることのできない、今となっては私たち卒業生のかけがえのない記念碑となってしまいました。

偉大な教育者伊藤先生の安らかな御冥福を、心からお祈り申し上げます。

記念誌の冒頭先生は次のように述べられています。

「今日までの三十余年にわたる私の生活は絶えず三つの大きな柱に支えられてまいりました。最も力強い柱は、申すまでもなく、大学における公的な生活をめぐる周囲の方々の温かいご理解とご援助であり、次いでは、家庭内での私的な生活を支えてくれました妻の惜しまぬ助力であります。残るいま一つの柱が愛培する庭のばらであったと申すことができます。

仕事や家庭での人との繋がりから全く遊離した私個人の生活を支え、四季にわたり、私の心に豊かな潤いと充実感を与えてくれたものが庭のばらたちであります。」

なんと見事に整理された人生の三脚でありましょうか。

おそらく先生は拋って立つその一本一本を夫々独立したものとして限りなく愛しみ、慈母の如く

大きな視点でそれらを調和させながら、無限の命を私達に吹き込んで下さっていたんだなあと、改めて深く心を揺さぶられる思いが致します。

写真の薔薇は「ビルゴ」(1947年)先生の最も愛蔵の一品で、記念誌の第1頁を飾っています。

小生の結婚記念にも額装で頂戴致した物で、今となっては恩師伊藤先生形見の家宝となってしまいました。

他の写真は、例の「望年会」とは別に、四講座の卒業生の中で直接先生に教鞭をとって頂いた悪童連中で、先生の御誕生日(5月31日)近傍に合せて先生ご夫妻をお招きしての誕生祝賀会、その名も「ビルゴの会」なるものを毎年開催致しております、その会における一コマであります。1997年、教え子の一人熊本大学の矢野先生が教授に昇進の慶事とも重なり、大いに盛り上がって伊藤先生の傘寿を祝う会となりました。

京の奥座敷、湯の花温泉での開催となりましたが、驚いたことに出席者の中で明け方まで一番気合が入って若々しかったのは伊藤先生でした。(これには俊子奥様もビックリ仰天)昭和40年代の先生そのまんまでありました。

あのころ三桁まで生きるぞと誓い合った先生・・・今年は主不在の第10回「ビルゴの会」となってしました。

あの日、本邦初公開!アカペラでの「バラが咲いた」をデュエットで熱唱してくださった俊子奥様と一緒に、これからも毎年、先生にあんなにも喜んで頂いていた「ビルゴの会」で、それこそ三桁になられるまで先生のお誕生日の歳を重ねさせて頂きたいと考えております。

最後に今一度先生の御冥福をお祈り申し上げ、併せて先生から授けて頂きました計り知れない恩情の数々に対し改めて感謝を申し上げ、追悼の言葉とさせていただきます。



伊藤克三先生を偲んで

伊藤克三先生を偲んで

佐藤 隆二 (A69)

大阪大学名誉教授伊藤克三先生は、平成15年3月9日、85年の生涯を閉じられました。

35年間、公私にわたってご指導を受けました教え子として、茲に、謹んで哀悼の意を表します。

昨年12月の研究室望年会(先生のご発案)の席で、お元気に歓談されておられたお姿は、先生がいつも口にされておられた「3桁、100歳」に叶うものとお見受けしておりますのに、誠に残念で仕方ありません。

先生は、大正6年(1917年)5月31日大阪でお生まれになり、昭和16年12月、京都帝国大学工学部建築学科をご卒業の後、清水組に約1年在籍されましたが、京都大学に戻られ、昭和21年10月、大阪市都島工業専門学校に講師として赴任されて、研究教育の道へと進まれました。その後、組織変更で名前の変わった大阪市立大学の助教授を経て、昭和39年1月に大阪大学教授となられました。大阪大学では、工学部構築工学科第7講座、後に名称変更された、建築工学科第4講座をご担当され、昭和56年4月停年退官し、大阪大学名誉教授となられました。引き続き、摂南大学教授として平成2年3月まで、お勤めになられました。

先生は、建築環境工学の日照、採光、照明など光環境がご専門で、昭和44年5月、日本建築学会賞、昭和60年5月に照明学会賞を受賞され、その学術、技術の発展に極めて大きな業績を残されると共に、学生の教育、後進の指導・育成に努められ、また、学術団体、環境行政に貢献されたご功績により、平成3年春、「勲三等旭日中綬章」をお受けになられました。

先生は、学術以外にもう一つ別の専門分野をお持ちで、その方でも「日本一」の実績を収めておられます。それは「バラの栽培」です。

電車騒音のうるさい阪急電車沿いに、わざわざお住まいを移されたのは、「バラへの日当たりが保証されるからであった」と、おっしゃる程の熱の入れ様でした。(後に線路が高架になり、思惑が外れたことを悔やんでおられました)

5月と10月のバラの季節になりますと、梅田と河原町の百貨店で開催される品評会にバラを出品されるのが、先生の年中行事で、その間、講義が休講となり、学生達は、大喜びしたものです。私も、研究室の学生は、バラの季節に先生のご自宅にお招き戴いて、バラを見せていただき、奥様のおもてなしをうけるという、すばらしい特権がありました。

また、大学教授が退官される時、研究業績をまとめた記念出版をし、記念樹を植えるのが定番となっておりますが、ご自身が咲かせたバラの写真と、バラに関する隨筆をまとめた「ビルゴ礼讃」と題する本を記念出版とされ、また、先生の思いを汲んで画家が描いた先生のバラの絵を大学に寄贈(以前は、工学部管理棟の中会議室に掛けてありました)されましたのも、先生のお人柄の現れでしょう。

ある時、美しいバラを咲かせる秘訣をお尋ねしたところ、「一生懸命世話をしたから言うて、うまく行くとは限りまへン。その年の雨、温度、天気などで、品種ごとに咲き具合が違い、10年、15年

に1回思わぬ品種が、すばらしい花をつけることがあるんです。咲かすんやのうて、咲いてくれるんですわ。」とのことでした。

これは、教育の場においても共通しており、教えることは、きちんと教え、後は本人に任せて、花開くのを待つという姿勢を貫かれておられました。教え子達が、伊藤先生を慕う原点がここにあるのではないか、と思っております。

先生は、少々、寂しがり屋の一面をお持ちのように、お見受け致しましたが、たった100年もすれば、みんな先生の近くへ参ります。お待ち下さい。

道場の特学工木土	道場の特学工木土
特研多（学工部）道場と研	（1）特学工木土）道場「研
替研多（学工部）道場と研	（1）南学工木）道場と研
替研多（学工部）道場と研	（学工部文）道場と研
替研多（学工部）道場と研	（2）南学工木）道場と研
道場と研と早川味部	（3）南学工木土）道場と研
道場と研と早川味部	（学工部基礎土）道場と研

「あれ？ けいの火打宿地元の土木をまのう」 道場と研と早川味部と日本農業大學生と日本農業大學生

平 成 年 度	樹 脂 系 樹 脂	油 脂	過 渡 性	對 應	各 道 場
五 林 元 宣 村 西			夫 田 新		道場「南
新 田 耕 樹 同 村				伊 田 宣	道場「南
毫 宮 三 做 太 山 中 廣 新 共 基				高 富 義 叶	道場と研
					道場や研 道場と研 道場と研

名誉教授の先生からのおたより

土木工学科の創設と発展(その1) — 講座編成と教授人事 —

名譽教授 伊藤富雄

1. はじめに。私は鷲尾健三先生とともに、構築工学科最初の教官として着任したので、「構築工学教室創立10周年記念誌」への寄稿を初めとして、この「構築会だより」に、鷲尾先生のご遺稿のあとを受けて、「構築工学科のはじめ(2)、(3)」と「構築工学科のおわり」、また「構築22年の思い出(その1)～(その5、最終回)を連載したり、「創立50周年記念誌」にも執筆して、構築・土木両工学科の沿革について書き続けて来た。

またその間、「大学というもの(その1)～(その10)」と題して、阪大、構築、土木に関連した思い出を10年間も連載した。

そこで今年からは、標記のテーマでいつまで続くかわからないが、定年退官した昭和59年4月までの沿革をまた連載することにしたい。

2. 講座編成。昭和41年度に土木工学科創設の当初、その講座組織と構築工学科の講座との関連などは下記のとおりであった。

土木工学科の講座	土木工学科の講座
第1講座（土木構造学第1）	第3講座（施工学）を振替
第2講座（水工学第1）	第5講座（河海工学）を振替
第3講座（交通工学）	第6講座（交通工学）を振替
第4講座（水工学第2）	第7講座（衛生工学）を振替
第5講座（土木構造学第2）	昭和42年4月に新設
第6講座（土質基礎工学）	昭和43年4月に新設

また、昭和41年3月末日に構築工学科に在職しそのまま土木へ移行した教官は次のとおりである。

講座名	教 授	助教授	講 師	助 手
第1講座		波田 凱夫		西村 宣男、林 正
第2講座	室田 明		村岡 浩爾	神田 徹
第3講座	伊藤 富雄			中山 次雄、三宮 和彦 松井 保、藤井 清司
第4講座				
第5講座				
第6講座				

3. 教授の人事。上の表からわかるように、室田明先生と私の2人が4人の教授を選考するという重責を担うことになった。しかしこのことは、安宅先生の後任とからんですでに以前からわかっていたので、約1年前から着手し、その方針として、研究業績が抜群で協調性に富んだ人材を、自薦、他薦を無視し全国的視野に立って、誠心誠意選考に努力しようと2人で申し合せた。

その結果、まず安宅先生の後任は大阪市大の小松定夫助教授とし、私が市大に橋善雄教授を訪ねて割愛をお願いした。ところが橋先生は、小松さんの恩師京大小西一郎教授と相談してお返事する、といわれる所以、私は、小松さんはいま先生の助教授です。先生どうかお許しを願いたい、と何度も頭を下げたら、不服ではないようだったので、今度はありがとうございましたと再三お礼を言い、喜んで帰って来た。

しかしその後何日かたって、安宅先生から突然電話で呼び出しがあり、後任のことで東大の平井敦教授と北新地で話しをしているから、室田さんとすぐ来てほしいということである。車で駆け付けると、前田幸雄元北大助教授を推薦したいとのことなので、私は憤然として、定年退官した先生の後任はその先生のご意向は伺わざる残った者で決めるのが大学の捷ですから、と言い残して席を立ち、安宅先生をひどく怒らせてしまった。

しかし、大先生2人のお話しを無視するのはどうかと思い、早速前田先生の経歴、業績などを調べて上京し、建設省土木研究所長村上永一氏の意見を求めた。すると、第1候補は小松さん、前田さんは設計に明るいので第5講座がよいでしょう、と明快で私たちとあまり違わない答えが戻って来た。それで、小松先生を教授、前田先生を当面助教授として採用の手続きをすることになった。

また、名大の榎木亨助教授を第4講座の助教授に招くことはすんなりと決まり、41年4月1日に、前田先生と榎木先生の発令があり、この2人が土木として新規採用した最初の助教授となった。小松先生は、教授任用手続に日数を要するので発令は6月16日であったが、土木の教授第1号となつた。

残るのは第6講座だけである。この教授の採用は43年4月以降であるが、早くから候補者を1人に絞り、交通工学・都市計画学の権威名大の毛利正光教授に決定した。しかし、名大土木の実力者成岡昌夫教授に、本人の希望もあるし教官の交流はよいことなので、ぜひ割愛してほしい、と私がたびたびお願いしても、看板教授を取られるのは痛手なのか、わかったとは言ってもらえない。困っていると、前田先生が私が代わってみようと申し出られ、榎木先生の力添えもあって、46年4月1日によくやく教授発令にこぎつけた。

これで、室田先生と私はやっと肩の荷を一応下ろしたわけである。

4. 学園紛争。43年の中ごろから学内が何かと騒がしく、大衆団交、部局封鎖など大学の正常な運営を妨げる暴力行為が激しさを増した。工学部でも、正規の授業ができず、大学つぶせ、釜洞倒せ、伊藤を殺せ、といった横断幕を掲げたデモが続き、遂に電気系3学科と原子力工学科が封鎖された。

こうした事態の激化とともに、私は、教室主任、工学部長事務取扱代理、評議員、総長補佐、工学部長事務取扱、工学部長と次々と重要な役職に就き、阪大全体の紛争鎮圧に当たった。これで、私の大学人生は研究から管理運営へと一変したが、しかし最も残念だったのは、足下の土木にもゲバ学生6、7人いて、大衆団交とかで私に敵対したり、土木の一室を占拠したことである。私はこれらの学生を卒業生とは思わず、どこで出会っても話をしたことがない。

名誉教授の先生からのおたより

功績賞受賞にあたって

名譽教授 楢木亨

本年5月30日の土木学会総会の席上、私は平成14年度土木学会功績賞を頂いた。過去の受賞者のお名前を伺って、私がその一員に加えられたことに恐縮した次第である。この受賞にあたっての感想については、土木学会誌8月号に拙文を載せさせて頂いたが、そこでもふれさせて頂いたように、50年間海岸工学という新しい分野に取り組んで何とか社会に認めて貰えるようにしたご褒美の賞と思う。この期にあたって、つくづくと私を海岸工学の道に進めて頂いた恩師の故石原藤次郎先生の配慮に感謝する次第である。私が卒業研究に海岸工学を選んだのは、昭和28年でその年には13号台風により伊勢湾沿岸は高潮により大きな被害を受けた。すなわち海岸防災が大きくクローズアップされてきた時期でもあった。その時石原先生から「今後海岸工学は土木の分野で伸びていく学問であり、君はその方面の尖兵となれ」と励まされたことは昨日のように思い出す。先生の期待通りの尖兵になれたかどうかは、世間の方々の評価に待つしかないが、私の受賞を自分の事のように喜んでくれた阪大榎木研究室OBの連中が、7月23日サウスタワーで祝賀会を開いてくれたことは本当に嬉しく心から感謝している。しかしこれらの研究室OBの連中の私に対する評価は、必ずしも優秀な大学教授の像ではないようあって、親しみやすい、相談し易い、面倒見のよい先生をいう評価であるが、私としては大学の教官として、特に土木工学科の教官としては大きな賛辞ではないかと思っている。

昔話をしている時に、必ず何が一番印象が深かったか聞かれる事が多い。しかし野心満々の若い時、脂ののりきった教授時代、定年まじかの学校行政に関係した時期、学術会議会員として他分野の偉い先生方と意見を交わせた時、夫々に思い出は多いので、どれが一番と言う事は出来ないが、神戸で国際海岸工学会議を実行委員長としてやり終えた3月後に、あの阪神大震災が起こったことは、それが3ヶ月前に起きていたらと考えたら寒気がするのが記憶に残る大きな思い出ではないだろうか？

私は平成15年3月で大阪産業大学も定年で退職して、現在(財)災害科学研究所所長を務め、またその財団の研究会(沿岸環境研究会)の会長として、西天満にある堂島ビルに事務所を開設して毎日そちらにいます。おついでがあれば一度訪ねてきてください。

私の夏休みの研究など

東京工業大学

名譽教授 脇山廣三

このところは良いニュースばかりあるわけではないのですが、研究で少しは実りのあることがありましたので、このことについて報告したいと思います。昨年の夏も例年のようにロスアンゼルスの娘の家で、一週間滞在しましたので、この間に、MAC G3 Power Bookを持ち込んで、耐疲労ボルトのアイデアを検証する目的でFEM解析を数例行い、数値実験的にはかなり見込みのあることが確認できました。

10年前ならば、A4サイズのノートパソコンで数千要素の弾塑性FEM解析をすることは無理だったろうなと思い、重くなる荷物を我慢して持ち込んで良かったと思いました。しかし、問題はありました。パソコンはトランクに詰めて積み込むのはいさか心配で、手荷物として持ち込むと米国内で飛行機に乗るたびに受付時と機内に入る時の二回徹底した検査にかかり、安全のためとはゆえ、何故私たちがと思っていました。

さて、解析に用いたプリポストは十数年ほど前にパスカルを用いて作成したもので、当時のマイクロソフトのOSでは実現しにくいマンマシンインターフェースの良いものに出来たと思っていますが、今では新しいMAC OSで使えるPASCALがないので、Windows上で走るようにするべきか、市販のソフトに切り替えるのが良いのか、その時々に適当な選択をするべきかなどと迷っています。

九月帰国して、この計算結果にもとづいて実験計画を立てました。その後の推進と試験用ボルトの製作は新日鉄の宇野暢芳君(A76)の担当、実験は西日本工業大学の平井敬二君(A73)としました。実験は今年に入ってから、平井研究室で順調に進み、この原稿を書く前に平井研究室でその結果の検討会を行いました。結果は解析結果からほぼ予想したとおりのもので、提案した私はほっと致しました。アイデアの基本はボルトのねじ部の応力は第一ねじ(ナットの底面に近いねじ)の谷に多く分布するので、その辺りのねじの分担力をへらすと言う単純なものです。

平成元年に提案した超高力ボルトは、提案からそろそろ十五年になろうとしていますが、平井敬二君の遅れ破壊促進試験や10年程かけた沖縄・九州・東京・室蘭などでの暴露試験の結果、遅れ破壊の危険のほぼ無いことがわかり、37条の材料認定を得ています。これと、現在京大教授の井上一朗君の指導で開発した高摩擦鋼板の組み合わせの接合部開発により、宇野暢芳君、永田匡宏君(A78)たちが、社長表彰を受けたり、鋼構造協会からも表彰されたのは非常に嬉しいことでした。

昨年の終わり頃、産業大学講義室の液晶のプロジェクターの光度が高くなり、解像度も高くなつたので、OHPより視認性に優れているので、これを使うことに致しました。しかし、今まで使っていたOHPの画像はパソコンデータとなっているのですが、やはり、かなりの部分に手を入れることになりました。

構造力学の講義からプロジェクターの使用はじめましたが、数学表現を嫌う学生の多いため、最初に図解法を持ってきています。使用するソフトはPOWER POINTで、力の合成・釣合・クレモナの図解法などでは、同一画面上に線の描き加えや消去が可能な簡単なアニメーションが出来るので、とくに図解法に相性がよいと思いました。それと学生の反応を見て、時には逆行したり、簡単に選択した画面に移行できるので、学生にも良い評価を得たように思います。ただ、このソフト作りはそれなりに時間を要するので、出来たら楽できるぞと思わない限り、割に合わないなどと思っています。今年も夏休みには海外で研究・研球と思っています。

近況報告

三浦山 勝也

名譽教授 森 康男

昨年3月に退官して以来早くも1年半が過ぎましたが、その間仕事の上では阪大とはまったく異なった環境におかれ、私事では次々と忙しいことが起り、「定年後」といいながら、幸か不幸か、「毎日が日曜日」とはなりませんでした。構築会会員の皆様にはすっかりご無沙汰したことをお詫びして、近況をご報告します。

福井工大の方へは、夏休みなどを除いて原則として週3日出かけております。今年はカリキュラム変更の年に当たり、同じ科目を2年生と3年生に教えるという例外の年でもあります。学生の学力低下をカバーし、ドロップアウトを未然に防ぐためにいくつかの新しい試みの科目も増えて、卒研ゼミの時間も入れて3日間で6科目8時限の授業をやるというハードスケジュールです。しかし、キャンパス隣りに温泉付の宿泊施設がありますので、温泉につかったあと生ビールを飲むのを楽しみに、座る暇もなく働いております。卒研生も毎年数名を担当しますが、直接指導しなければなりませんので、精神的には阪大時代にまして若返るような気がします。

研究の方も手助けをしてくれる人はおりませんので、一人でこつこつできるような研究を選ぼうと、阪大時代に開発しました道路空間評価システム(VERS-III)をつかって、高齢運転者に配慮した高速道路標識設計の改善というテーマに取り組みだしたところ、今年度と来年度の科研費に採用されまして、のんびりやっておれないということになってしまいました。

福井へ通う便利も考えて、仮住まいから京都に落ち着くことにしました。この3月に結婚以来実に17番目(海外を含む)になる家に転居しました。われながら良く引越したものだと驚いております。場所は京都市の西端で、京大桂キャンパスの地続きの丘陵です。京大のお陰でバスの本数が増えたとはいえ、交通は不便ですので、24年ぶりに車を持ちました。保険料や税金が高くなっているのにびっくりしましたが、自動車の操作性や装置が本当に良くなっているのにも驚きました。福井へ堺市から毎週車で通ってくる先生もいますが、彼曰く「車で来るほど楽なことはない。座って体の一部をごくわずか動かしておればよいのだから・・・」というのに同感しています。道路工学や交通工学を教えているのに、今さら何を驚いているのかとお笑いの方も多いでしょう。

お盆前に名神高速道路を走りましたが、遠くの県のナンバープレートを付けた車がたくさん走っていました。それにつけても、昨年来の高速道路整備に関する議論には関心を払わざるを得ません。東大名譽教授の越先生が「道路」6月号にお書きになっているように、高速道路の整備・運営の仕方をどのようにすれば最も効率的・効果的かという議論を始める前に、「民営化だ」という結論に無理矢理こじつけた議論と結論でしかないと思います。高速自動車国道の整備という国民全体の関心事を、一部のジャーナリスト受けのする人たちの議論に任せてしまって本当によいのでしょうか。また、多くのメディアが世間受けするために、真実を見極めない片手落ちで世情に流された報道に走ることには、「またか」と不快感がつのります。

「土木計画学」の授業では、社会基盤施設の整備・維持管理の重要性と波及効果を説き、その効率的実行を科学的に計画する手法を講義したつもりですが、そのようなことはどうでも良さそうで、終戦前の軍国時代と同様に「科学」や「工学」や「技術」がいかに弱いかを垣間見た感がします。公共事業への投資の多くは悪になり、もうけの出る民営企業のみが善となる今の価値基準は、折からの北米の大停電が示唆するように遠からず破綻するだろうと嘆くこの頃です。

都市再生にむけた快適な都市気候への夢 —地球総合工学の新たなフロンティアの一提案—

畠山 庄司 (C70)

7月某日。サンフランシスコから関空への帰途の機上。「どう、サンフランシスコ、おもしろかった?」「そうねえ、まあ、よかったかも。」「というと?」「うーん、なんといつてもあの爽やかな天候にはびっくり。到着してターミナルビル出て、レンタカーセンター行く時、エアートレインのプラットフォームに上がって、初めて外の空気に触れたでしょ、風がスーッとして空が真っ青だったですよ。大阪じゃ今頃、空見るのもうっとおしいもの。」・・・そうだったな。サンフランシスコは夏でも涼しいとは聞いていたが、私もこれほど快適とは思っていなかったのだ。そういえば、2軒目のモーテルは冷房がなかった!が不快ではなかったし、ゴールデンゲート橋を渡った高級リゾート、サウサリートのスーパーマーケットでも冷房がなく窓から風を入れていたっけ。エアコンのないスーパーなんて日本ではまず見受けることはない。ガイドブックを見ると、サンフランシスコの夏の平均気温は13℃~20℃。一方、冬はどうかというと8℃~13℃。要するに夏は涼しく冬は暖かいのである。日本の避暑地も快適なところは沢山あるが、冬は寒さが厳しいところばかりである。サンフランシスコのこの気候も西岸を洗うアラスカ海流のお陰らしい。

ここで話を替えてシリコンバレーのこと。サンフランシスコから南東へ100キロ程行ったサン・ノゼ市がその中心だ。マスコミでもかつてほどではないにせよ、このIT産業の中心地としてよくとりあげられる。新たな産業立地政策の議論でも必ずと言ってもよいほど、羨望のまなざしのもと成功例として登場てくる。ところが、私の周囲では土木屋が多いせいか、シリコンバレーを見に行つたという話をついぞ聞かない。電子ハイテク関係者だけの専門エリアなのか。サン・ノゼ空港には成田から直行便がある位だから、結構、往来頻繁ということだ。

それで雰囲気だけでもと思い立ち寄った。しかし期待した風景はちっともでてこない。バレーというから丘があったり、坂があったりして良い雰囲気なのか想像したが、平たいところで何の特徴もない。各企業も広い地域にバラバラと散らばっていて、何らまとまった印象を与えない。説明的には最先端のスタンフォード大やUCバークレー校があるから、それが集積の核になったのだと言われている。でもそれだけでは納得できないなあ。もう少し南に行くと、モントレー、カーメルがある。この2つのまちを結ぶ「17マイルドライブ」という快適な景勝地を通る半島周回道路がある。アメリカでは珍しく有料道路(約千円)だ。途中にはペブルビーチをはじめ数々のゴルファー憧れの名門ゴルフコースもある。ところがこの道路の両側には、林の中に立派な別荘が続き、マイクロソフト社のB.ゲイツ邸もあるのだとか。有料道路もひょっとすると、誰でも彼でもやってこないための箇止めかもしれない。こんな立派な不動産の所有欲を満足させてくれる環境が近くにあることもシリコンバレーの形成要因として不可欠なんだろう。勿論、サンフランシスコの持つ豊かな歴史、文化、スポーツ環境、グルメなどが、そしてこの快適な気候こそが決め手ではないのか。

どうも注文し過ぎた機中のアルコールの酔いがまわってきたようだ。大阪の都市再生を考えるといつても歴史、文化、研究機関、グルメ、多様で深みのある住環境など、他の地域に比べても遜色

ない利点揃いではないか。でも大阪の夏の暑さだけは大きなハンデになってはいまいか。都心部だけでも良い、局所的でも良い、厳しい夏の気候を緩和する知恵が絞れないものか。それも地球総合工学で。部分的な取り組みとしては地球温暖化防止から、透水性・保水性舗装や屋上緑化、反射能屋根塗料、風の道つくりなどが始まりつつあるが、どれだけ低下しようとしているのか見えない。私見でいえば、30℃ちょい位までにできるといいが。都心地表部の35℃～45℃といった高温に比べれば、海水も地中も高層気流も涼しくするのに活用できるのではなかろうか。風をうまく流すことができれば、これも体感的には有効であろう。ハワイもサンフランシスコも湿度は80%とか90%と多湿であるが、貿易風などが救ってくれているようだ。上水・下水にならい、給熱・廃熱道なんていうインフラも構想できるかもしれない。雪国では融雪のために、道路に散水やヒーティングを施しているが、ヒートアイランド対策からも参考にならないか。当面は都心向けの総合的なシミュレーション・モデルができると社会的な理解も・・・。

こんな夢物語を言うと、なにをバカな！自然条件は改変すべきではないとの指摘も、もとよりされよう。でも、ここ数十年にわたる数度の上昇は我々都市民の活動自体が原因であり、我々が変えたと考えるべきではないか。ヴェネツィア市は地盤沈下のため、毎年、高潮時に幾度となく海水が街路を覆い、貴重な世界遺産が危機に瀕している。原因は本土側メストレ市の工業開発による地下揚水である。そのため、この春、ようやく待望の“モーゼ・プロジェクト”と名付けられた数千億円の水門事業が着工したという。広大なラグーン(潟)全体を高潮時には3ヶ所の入り口で締め切り、延べ45キロにわたり、海面という自然所与と考えられてきた地球的条件を制御しようと行動をおこしている。

大阪でも都市再生、そして新たな産官学の協働など、今までにない取り組みが始まろうとしている。しかし、都市再生といってもロボテクスやユビキタス、バイオ、フィナンシャル・センターばかりが担うのではなかろう。それらを支える適切なインフラがやはり必要なのだ。大阪らしい特色ある地域総合工学としての新鮮なフロンティアを切り拓きたいものと思う。

そんなことを考えているうちに、関空をめざし機も高度を下げ始めたようだ。また明日から仕事だ。シートベルトを締め直さなくちゃ。

東京から見た関西の都市再生

(NBA) 客 角 棚 木

渡 部 久仁雄 (A76)

私が勤務する都市基盤整備公団は、特殊法人改革の中で廃止となり、来年の7月に独立行政法人「都市再生機構」に移行します。新法人では、名前が示していますように、「都市再生に民間を誘導する」ことが主要な業務の一つになり、これまで公団が行ってきました賃貸住宅や施設の建設を自ら行うことは原則として取止め、民間事業者が都市再生に取組むための、道路等の基盤整備やコーディネート等のバックアップ業務を行うことになります。

このように、今回与えられたテーマの副題にあります「関西の都市再生」については、新法人にとって重要な課題ですし、私にとっても非常に関心のある問題であり、私自身が今年の6月末まで東京臨海部における大規模開発に携わってきたことや、汐留や六本木ヒルズの開発を目の当たりにしてきたこと中から、思いつく点を自由に述べさせていただきます。

まずは需要の面です。東京一極集中がさらに進み、大阪に本社のあった企業の東京移転が進む中で、大阪のオフィスや住宅の需要が東京と比較して非常に少なく、大規模な開発の採算性が厳しい状況にあることです。

もう一つは開発適地の問題です。東京では、臨海部が東京駅から比較的近く、またマストラもある程度整備が進んでいるため、工場跡地等の用途転換を行い、土地の高度利用を図ることが可能な敷地が、大阪と比較して数多くあることです。大阪の場合、大正区や此花区等の臨海部は中心部から距離があり、またマストラが未整備であること等から、大規模な開発は非常に難しい状況です。

このような状況から、東京では民間だけで大規模な開発が可能な場合もありますし、また公共側で基盤整備を行えば、民間が投資を行ってあつという間に開発が進むという状況が見られますが、大阪では上記のような理由でなかなか開発が進まないのが実状と思われます。

このため、経済状況の急激な回復が見込めない中で関西の都市再生を進めるためには、地区を絞り込み、都市再生のシンボル的なプロジェクトに限って、公共側が基盤整備を集中的に行い、また企業進出のための様々な優遇措置を設けるなど、短期間に民間が投資可能な状況を作り出すことが必要と思われます。

そのためには、他の地区への投資又は他の施策の実施を一部延期又は縮小するなど、限られた予算の中で思いきった施策の展開が必要となります。都心部に残された貴重な用地である梅田北ヤードの有効活用や御堂筋の再生などが短期間に実現できれば、投資以上の経済効果が期待できると思われます。

ただし、このような集中的な公共投資等を行うためには、多くの人の理解を得ることが必要となります。単に公共と民間だけでパートナーシップを組んで事業を進めるのでは、説明責任を果たすことは難しいと思われます。やはり、公共と民間に加えて、大学又は有識者がパートナーシップを構築し、関西の都市再生のために思いきった施策が展開できるような状況を作り上げることが望されます。

その「学」の中心的な役割を、大阪大学が担うことを期待しますとともに、その中でも構築会が、関西の都市再生について積極的に提言を行って活動されることを期待しています。

KRP(京都リサーチパーク)の開発を通じて

水野成容(A84)

今から約14年前の1989年、京都市下京区のガス工場跡地に京都リサーチパーク(以下:KRP)が誕生しました。これは、民間企業による遊休地開発であります、同時に産官学連携のパートナーシップによる都市再生プロジェクトの先駆的な事例とも言えるのではないかと思います。私はこのプロジェクトの初期から12年半携わってきましたが、今回「産・官・学のパートナーシップの構築」について考えるにあたり、少し振り返ってみたいと思います。

京都市下京区の五条七本松通りにある約10haの大坂ガスの製造工場が、天然ガス転換により遊休地化した際、土地を保有したまま自社開発を行うことを選択しました。京都の中心部に位置するとはいえ、ビジネスや商業の中心から外れていたために、通常のビルや商業開発でなく、当時はまだ耳慣れなかった「リサーチパーク」というコンセプトを掲げ、研究開発型企業の育成を行いながらテナント開発を行うという、ベンチャーインキュベーションセンターを目指しました。また、開発にあたっては用途変更や容積率のアップなどの都市計画上の基盤整備も必要でした。

施設整備面では先駆的な試みがされ、行政の研究施設と一体的にKRP(株)が設計・建設し、竣工後、行政がそれぞれの建物を購入(区分所有:土地は借地)するというPFI的な手法を用いました。これにより、設計から竣工までの期間が大幅に短縮され、予算の手続きが簡略化されただけでなく、完成した施設もそれぞれの建物が地下駐車場上部の中庭を囲み、良好な環境と景観を形成しています。また、会議ホールや展示場、駐車場、レストランなどの共用施設も個々の機関が所有せず、KRP(株)の施設を必要なときに利用することにするなど、全体としての効率を高めています。

オープン後は、TLO事業の立ち上げや医薬関連等のさまざまな研究会、テレビゲームやエデュメントに関する産官学の共同研究やイベントなどを行うなど、京都における産・官・学の連携による産業振興拠点として、実績を上げてきました。

このように多くの方々によって支えられてきたKRPですが、そこで試みてこられた手法や運営ノウハウは、決して特殊解ではなく、関西の都市再生プロジェクトに適用可能なものは多いのではないかと思われます。特にこのプロジェクトを通じて、開発者は単に箱を作ることを計画するのではなく、その中で行われる活動を具体的に想定し、それを創造し支援するプログラムまでを含めて計画し、実行することが重要であるということを実感いたしました。

産官学の連携は、今後はハードの整備よりもむしろベンチャーやIT産業の育成などのソフトの充実においてこそ、効果的になるかと思います。その際は、産官学のそれぞれの強みを互いに活かし、役割分担を明確にすることが重要です。大学は当時と比べて、大学発ベンチャーの創設やTLOなど事業化の意識を高めておりますが、立ち上げた後の事業経営などについては、民間と連携した方がうまくいくのではないでしょうか。また、事業化支援等については行政の役割を期待するところがありますが、現在のベンチャー育成支援などは、経済振興や都市開発など複数の部署が別々に行うことも多いので、産業再生と都市再生が一体的に進むように総合的な視点からプロデュースしていくことが必要だと思います。

時に建築系の出身者は、都市開発について考える際、建物自体に関心が集中し、中での活動にはあまり関心を持たないことがあります、ハードと同時に、産官学のパートナーシップによって産業支援や人材育成などのソフトのプログラムを構築していくことが、結果的にプロジェクトを成功に導くのではないでしょうか。

帰去來の憂愁

(C53) 岩本 道

高野 浩二 (C53)

“帰りなんいざ”の思いが頭の中を過ぎりだしたのは七十才の頃からだったろうか？それは主として体力の衰退と外界の遷移によるものであろう。

成り行き八割に自己評価二割で選んだ土木工学を携さえ、技術公務員になったことは、確かに、私の幸運であった。時節は戦後の復興期、続いて高度成長期。現場施工から設計、調査、計画、と遡って地域、国土に至るまで、凡そ“土木”という言葉の到達範囲の事、に関与することができた。そして、社会の欲求を背景に、作り、造りまくった。公務員活動の半ばにおいて遭遇した遺跡問題は、私に哲学、論理の確立を迫ったが高等学校以来培ってきた素養といったものにも助けられて、まずまず同化し得たと考えている。再就職した企業でも、環境の変化は殆ど感じることなく、むしろ、肩の荷の軽くなったことを楽しめる勤務でもあった。社会人生活の末期になって、不図も取り組むことになった。“会社更生”も、意欲の復活、新しい知識の吸収、交流の拡大、といった数々のものをもたらした。これ等の歓びは、すべて、ご縁のあった多くの社会の人々、先輩、友人、後輩達、家族、と共にあってはじめて得られた歓びであり、この事を、よく噛み締める昨今である。

その意味では、私の“帰りなんいざ”は、陶淵明の“すでに自ら心を以て形の役と為す、爰ぞ惆悵して独り悲しまん”のそれとは大きな違いがある。しかしながら、彼のいう“吾が生の行休するを感ず”は全く同じであることに“憂愁”的根源があるのであろう。現在、“給与”と表現されるものは殆ど無くなり、勤務の義務もまず無い。しかし、いささか名誉職的な色彩はあるが、相当な責任感を伴う準公的業務が数件あり、他に、適時依頼される原稿、講演、なども可成りの件数である。加えて、元の企業の方で席も確保してくれているので、所在と連絡に不自由はない、という至って恵まれた環境である。しかしながら、このような私自身の機能も高齢化に伴って、可能な限り次世代に引き継いでゆくのが当然であり、またその方向で進んでいるのであるが、そのことが、責務を果たした歓びと同時に、私自身の老化を一層促進させるのではないか、という不安も伴い、変に甘酸っぱいものを感じさせるのである。さらに、私は至って無趣味である。とりわけ、独りで楽しめるものを持っていない。よく、古代史が趣味ではないか、という人があるが、私の古代史は、目的と制約とを伴う仕事の一環であって、趣味、とは言えないものなのである。他の人からどのように見えるかは判らないが、そのような不安を漠然と感じながら、現在の生活、活動を謳歌している、と言えるだろう。陶淵明の“富貴は吾が願ひに非らず、帝鄉は期すべからず。良辰を懷ひて以て孤往し、或いは枝を植てて耘しする。東臯に登りて以て舒嘯し、清流に臨みて詩を賦す。聊か化に乗じて以て尽くるに帰せん、夫の天命を楽しみて復た爰ぞをか疑はん。”の心境に達することを願いつつも……

こんなことを書きながら、ふと、今の心境が、青春の末期、私にとっては、高等学校の三年生の頃の心境と通ずるものがあることを感じた。私の母校、第三高等学校のいわば寮歌といわれるものの中に、“行春哀歌”なる歌がある。そのおわりの歌詞を唱って結びとする。

“友よわれらが美き夢の去りゆく影を見やりつつ
離別の酒を酌みかはし わかれのうたにほほえまん”

回 想 63 年

坂 本 成 彦 (C63)

昭和15年(1940)生まれで、姉2人弟1人の4人きょうだい。三重県津市で小、中、高校迄過ごし、大学以降は関西に居るので人生のおよそ3分の1は津、残りは関西圏に暮らしていることになります。

誕生日の翌年に太平洋戦争が始まり、5歳(1945)に終戦となったので、物心ついた頃は戦争中から戦後の耐乏生活の時代でした。断片的ではありますが当時の事が目に浮かびます。終戦の8月15日は大変暑い日でしたが、シャツを着せられラジオの前に正座させられ母と二人で玉音放送を聞きました。横の母は、なぜか涙をポロポロ流していましたが今では分かるような気がします。毎年8月15日には会社で黙祷を捧げますが、その度に、この時のことが思い出され胸があつくなります。

さて、小学校6年生から中学、高校、大学時代に熱心に取り組んだ「剣道」の事に、触れておきたいと思います。終戦後、柔道剣道など武道は、禁止されていましたが、昭和26年サンフランシスコ条約、日米安全保障条約が調印され、この頃から剣道が「しない競技」という形で復活されました。私が始めたのはその頃で、たまたま近所の結城神社で教えてくれるということで、動機はチャンバラです。結城神社は「太平記」の「結城宗広公」そして「しだれ梅」で有名。

ところで思い出されるのは、当時《気合》《発声》《体当たり》は禁止で、気の抜けた話です。“袋しない”(丸竹の先端約50cmを細かく割り、袋をかぶせたもの)を使い、防具はフェンシングの防具に似たものでしたが、徐々に現在の剣道に戻されてきました。高校では、柔道剣道は体育の正課となり、クラブ活動も盛んとなりました。

四日市商業高校と津高校が県では、1、2位を争うライバル校でしたが、東海大会では中京商業が抜きん出て強くいつも負けるので、全国大会への機会はありませんでした。

大学時代は、剣道に明け暮れた毎日でした。当時は学生運動が盛んで、イデオロギー、ベトナム、安保問題などで学内集会、市内デモ行進などがよくあり、そのために授業休講などがよくありました。私は興味なくひたすら稽古につぐ稽古。日曜日は試合と稽古、あるいは、合宿の毎日でした。夏の合宿は特に厳しいものでしたが、この時の、体力の極限かと思われる疲労こんばいの苦しさ、歯を食いしばって乗り越えて行く経験が、その後の社会生活でとても大きな支えとなり、苦しい時のバネになりました。また、学部の異なる先輩、同僚との交わりに刺激と影響を受けたことは少なからずあり、今も交流は続いてます。「継続は金なり」ということはありますが、卒業後も稽古を続け、すでに6段、7段取得のかたがたが何人もおられます。

さて、昭和30年代は日本の高度成長期で、地下鉄や高速道路の建設ラッシュ。その中、私は昭和38年(1963)に鉄道会社へ入社。翌年には東海道新幹線が開通し東京オリンピック、万博博覧会と開発ブームが続き、初任給は、どんどん上がってゆく時期でした。その後いろいろなことがありました。会社人間を続けるうちにいつの間にか63歳になっており、年をとると故郷がよけいに懐かしくなります。

末筆になりましたが、この6月から新しい活躍の場を奈良県のバス会社に移しました。引き続き社会にお役に立つよう、仕事に、地域に、趣味にかかわってゆきたいと願っております。

第二のふるさと「つくば」

(CWA) 南湖日本

中江 新太郎 (A63)

私にとって、つくばは思い出の深いところです。今から20年前に、つくばへ転勤しました。入社以来20年間勤務していた地元大阪から。筑波研究学園都市の中心には、国の研究機関が整備されています。その周辺に民間の研究機関がとりまいています。1985年につくばで科学万博が開催されました。私の勤務先である(株)奥村組は科学万博の前に、このつくばの地にも、研究所を新設しました。大阪人間が、花の東京を通りこして、つくばへと、会社のパイオニアになった訳です。

国の肝煎りでできたこの科学の街は、緑豊かな綺麗な街です。四車線、六車線の立派な道路が街中の縦横に通っています。車道と立体交差する遊歩道があり、自転車がのんびりと走っています。林で囲われた大きな公園が、たくさんあります。渡り鳥が飛来する池や、温水プール、フィールドアスレチックなどを備えた洞峰公園。栓抜きと諱名を貰った高さ45mの展望塔がある松見公園。とんがり帽子の時計台が目印の二の宮公園。

国の研究機関群のど真ん中に、筑波大学があります。わが国で初めて抜本的な大学革命を行い発足した総合大学です。今年で30才になります。昨年、2002年に同じ筑波研究学園都市にある国立図書館情報大学と統合し、新「筑波大学」として再出発しています。さらに、大阪大学と同様、2004年度に予定されている国立大学の独立法人化に向けて、自主的な経営のあり方を模索している様子です。

研究学園都市の研究者は四人に一人の割合で博士号を持っています。ものすごく頭のいい子が多くいます。ITへの対応では国の先進的教育用ネットワークモデル地域に指定されています。もちろん、お母さん方も高学歴の持ち主で、教える側の小学校、中学校の先生方が大変です。授業参観では、教育熱心なお母さん方から、いろいろ教え方を突っつかれます。生徒は勉強がよくでき、成績が正規分布しないので、通知簿のつけようがないし。

20年前には、街なかにほとんど赤ちょうちんの店がなく、困りました。喰い道楽の街、なんばや天王寺の片隅で、アフターを楽しんでいた我が身にとっては。つくばでは移動が車というのがあたりまえだったから、しかたのないことでしたが。お陰様で小遣いが余り、殊勝にも、本をたくさん買っていました。昼寝の枕にしかならなかったけれど。街がどれだけクリーンで綺麗でも、やはり人は人、息抜きの場所も必要です。ある時期、自殺者が多くなりました。今は、代行タクシーが安い割増料金で人もマイカーも送りとどけてくれます。大学の周辺ほかに、立派な飲み屋街ができ、ナイトライフが楽しめるようになっています。

2005年に常磐新線が開通します。東京秋葉原とつくばを45分で結びます。つくばエクスプレスと格好良い名称がつけられています。現在、つくば市の人口は約20万人です。茨城県では県庁所在地の水戸に次ぐ第2番目の市です。つくばでは、今、住宅分譲ラッシュです。近い将来、県下人口第1番目の市になることでしょう。

私は現在東京本社に勤務しています。我が家は茨城県守谷市です。つくばの近くです。つくば、東京に永く居ても、相変わらず、大阪弁で生活しています。ちょっとは東京弁らしくと思ったけれど、なかなか抜けきれません。先端の街でも、大阪弁をかわいがってもらっているように思っています。もう、このままやります。

こんな街、つくば、が大好きです。

卒業30年振り返って

木村修治 (A73)

4月、構築会から封書が届きました。ふくらみがあるし、はて何だろうと思って開封すると卒業30周年祝いのタイピンでした。全くその認識がなかったので、ア一卒業して30年にもなるのだと感慨ひとしきりでした。

ここに1枚の写真があります。何時撮ったかは記憶は定かではありませんが、多分入学式のガイダンスの後かなんかでしょう。なんと学生服姿が約半数、メガネもセルフレームばかりです。なんとなく皆まじめ顔で可愛らしい感じさえします。我々の子供たちも同じ年か、やや上の年でしょうが、この写真の方が素直に見えるのは今の世相、風俗を意識しているからでしょうか。

我等同世代260数万人、団塊の世代と呼ばれ、世の中の波浪にもまれて50有余年を過ごしてきました。波浪の種類や規模は色々ですが、少なくとも五つの大波を越えて来たのではないですか。

第一の波浪は大学入学前後です。T大の入試中止、入学しても教養部は封鎖中、授業は無くクラブ活動のみの生活でした。知識欲に燃えて？入学したのに....、授業開始は12月だったと思います。でも普通に工学部へ進級できたのも不思議でした。

第二の波浪は卒業時、オイルショックの波をかぶり就職は厳しかった、特に大学院へ進学したものは厳しかったと思います。

第三の波浪は結婚時、団塊人間が多すぎて結婚できないものが出るのではと世間では言われてましたが、我等は皆優秀？この波浪は上手くかわしたようです。

第四の波浪は住宅購入時、40歳前後のマイホーム取得への気持ちの昂揚以上にバブルによる高値と買った後のバブル崩壊による大暴落。これには上手く波に乗れたもの、高波にさらわれたもの色々でしょうが、皆決して済の穏やかビーチではなかったはずです。

そして最大の第五の波浪。言うまでもなく昨今の建設大不況の怒涛の中で、受注減少と低価格競争です。今、ピッティングとローリングに襲われながらも沈没しないように一所懸命といったところです。

最後につらい第六の波浪をも控えています。我等は、65歳からでしか厚生年金は受給できません…先のことはあまり考えないようにしましょう。

ここにもう一枚の写真があります。4年前、入学30周年を記念して開いた獅子同期会の写真です。(昭和44年入学なので獅子：シシと称しています。)最初の写真との違いがわかりますか。違いは、頭の姿とメガネのフレームだけです。笑顔はちっとも変わっていません。

波浪ばかり書きましたが、我等は笑顔と共に結構したたかです。我が社でも昭和48年大卒入社組は、他大学を含めて優秀であり、バイタリティーもあるとの評価を受けています。その我等が皆会社の要職を務めるようになってきた今、波浪にもまれ続けた粘り強さを發揮すれば、まだまだ未来はあるのではないでしょうか。



S44 入学時



H11 入学30周年記念獅子同期会

最後に来年、入学35周年記念で集まる予定です。幹事さんヨロシク。

(誰かは忘れましたが、指名にて決定しています)皆さん全員で集まりましょう。

卒業20年雑感

丁野成人 (A83)

私が入学した1979年は、初めて共通一次試験が導入された年で、その当時の新入生は画一的とか新人類などとよく言われました。大学生活の前半はきわめて楽しい時代で、一昔前までの学園紛争のような政治思想を語る人は殆どいなく、コンパ、合ハイ、海外旅行、バイト等にあけくれていました。TVではこの時期フィーリングカップル5対5とかラブアタックが放映されており、私もラブアタックに出演しかぐや姫を目指して孤軍奮闘した思い出があります。また巷では自己啓発・啓蒙などという言葉が氾濫しておりそれに触発されて「外を見なければだめだ」と思いヨーロッパ、アフリカを1ヶ月半ほど放浪の旅にしました。その費用算出の為にバイトにも精を出しましたが、焼き芋屋のバイトが一番大変で、軽トラックで売り歩くのですが、箕面公園では猿に生芋を盗まれるは、十三ではチンピラに囮まれるは、大変苦々しく楽しい思い出が一杯です。しかし今思えばこれほど自由でゆったりとした時間が持てたのはこの時期だけであり、それはそれで人生において大変有意義だったと思います。

しかし学生時代の後半になってくると、単位の取得、卒業論文、卒業設計等のプレッシャーが待っていました。私の卒論は「フラクタル理論によるスカイラインの複雑さの研究」がテーマで、今となってはフラクタルという言葉は、ITや経済学などでも応用されよく耳にするようになりましたが、当時そこに目をつけていた奥助手(現北海道大学教授)の感性には今でも驚かされます。

私が社会人入りした85年当時は、建設業冬の時代といわれ、就職活動は大変厳しいものでした。そのため同期生は、建設業だけでなく、不動産・生命保険・電気・ガス・鉄道等幅広い分野に散らばっています。今でも同期生で阪建会コンペと称して年2回ほどゴルフ大会を開催していますが、建築主の立場、請負者の立場の人が混在しており、大変楽しい情報収集の場になっています。

私はゼネコンに就職し、入社後は現場の管理技術者として、17年間大阪市内のプロジェクトを中心に行工を担当してきました。当然ながら学生時代とのギャップは大変なもので初期の頃は大変苦闘しましたが、ある日P.F.ドラッカーの「新しい現実」の著書に出会ってからは、急に目の前が開けてきたような気がします。そこにはマネジメントの思想がありました。その後、昨年4月より新たに設置された生産調達部に配属となり、現在に至っています。みなさんもご承知のとおり建設業界におけるコスト競争は大変厳しく、個々の作業所購買から本店による集中・集約調達の方向に移行しております。生産調達部はそのコスト競争に打ち勝つための主要部署としての期待が大きく、現在新しい調達手法の構築等に頭を悩ましているところです。

最後になりましたが、学生時代に読んだ森田慶一氏著の「建築論」に「建築はもっとも根元的な人間作品であり、しかも、もっとも複雑な完全な人間作品である。建築の目指すものは、人間の生存・生活のすべての面に係わり、人間そのものに密着していて途方もなく複雑なのである」と書いていますが、今いくつかの建築作品の創造に実際に携わる中で、その複雑さと人間という言葉が身にしみると共に、新たなチャレンジ精神が湧いてくる今日この頃です。

卒業10周年を迎えて

大西 弘志 (C93)

この度、93年に卒業した我々もめでたく、と言いますか、何とか無事(?)に学部を卒業して10周年を迎える、ということになりました。この文を書き始めるに先立って、構築会幹事長名での執筆依頼をうけとり、何とかなるだろう、と受けたのですが、よくよく考えてみると何を書けばいいのか... 書くべき内容が見当たらないのでは? ということに気がつきました。10周年の同窓会は一部で早期に実施するという動きもあったのですが、時間的な余裕がないということで12月の第2週あたりを軸に有志で調整を図っている状態です(案内状は9月中旬に発送の予定ですので、同期の諸君におかれましては万難を排して出席していただくようこの場を借りてお願い申し上げます)ので、これについて書くというわけにもいかないし、卒業後いろいろと異動したわけでもないので、自分自身の動向であれこれ書いても面白くないし... という状態です。

そこでいろいろと頭をひねってみて考えているときに気がついたのですが、これまでの10年で実感したことといえば、「少年老い易く、学成り難し」ということであることに気がつきました。これは私の大学における研究テーマ自体が長期にわたる研究期間を要求する「腐食」に関するものに偏っている、ということもあるのですが、とにかく自分が漠然と見込んでいた予想よりもこの10年のうちに発表までこぎつけた研究成果がかなり少ないと、ということに気がついたのです。これには、言い訳すれば試験機の容量や人手の不足などいろいろと並べることはできるでしょうが、第一に挙げねばならないものとして、私自身の慢心、もしくは油断があったのではないかと思います。思い出してみると昨年度まではどこかに「まだまだ時間はある」とか「そのうち何とかなる」という考えが頭の片隅にこびりついていたのではないかと感じます。10年の節目を迎えるに当たってこれらの発想を頭の中から一掃すべく、努めて「それほどこの研究にかけられる時間に余裕はないぞ!」と考えるようにしているのですが、そうすればそうしたで、焦りから空回りしているという部分が出てくるようになり、なかなか自分に見合った良い「落とし所」を見つけられていません。少なくともここ1~2年のうちには良い「落とし所」を見つけたいと思っています。また、仕事の進め方にも一部、問題点があることを認識しておりますので、そのところの修正をしていければ、と思います。

ここまで、自分のことばかり書いてきましたので、ここで少し私も関与している学校での活動を紹介させていただきますと、今年度は9月10、11日と「第5回鋼および合成構造橋梁の日独共同シンポジウム」を大阪大学コンベンションセンターにて開催します。また、予定通りに進みますと、来年度には日韓共同で橋梁の維持管理に関するジョイントセミナーを開催することになっております。日独共同シンポジウムに関しましてはHP(<http://www.civil.eng.osaka-u.ac.jp/bridge2/JG5th/JG5top-j.htm>)に情報を掲載しておりますし、日韓ジョイントセミナーに関しましてはそのうち更新される(と思います)社会基盤設計学領域のHPに掲載予定ですので、興味のある方はぜひアクセスしてみてください。

愛知支部だより

愛知支部は、東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県に在住もしくは勤務している会員で構成しています。

東海三県で現在進行している主なビッグプロジェクトは以下の通りです。

- ・中部新国際空港(2005年開講予定)
- ・愛知万国博覧会(2005年開催予定)
- ・第2東名・名神自動車道

特に、愛知万国博覧会は大阪万国博覧会以来の国際博で、以下のような内容で開催されます。私どもは、技術的な支援からボランティア活動まで、積極的に支援していきたいと考えています。

1：開催の目的 21世紀の人類が直面する地球規模の課題の解決の方向性と人類の生き方を発信するため、多数の国・国際機関の参加の下、自然の叡智をテーマとした新しい文化・文明の創造を目指して開催する。

- A. 壮大な文化・文明創造事業
- B. 多様な文化、価値観の交流の場
- C. 日本から世界への発信
- D. 現在から未来への発信

2：名 称 正式名称：2005年日本国際博覧会

略称：愛知万博 愛称：愛・地球博

3：テ ー マ 「自然の叡智(Nature's Wisdom)」

- ＜サブテーマ＞
- A. 宇宙、生命と情報(Nature's Matrix)
 - B. 人生の“わざ”と智恵(Art of Life)
 - C. 循環型社会(Development for Eco-Communities)

4：開 催 期 間 2005年3月25日～2005年9月25日(185日間)

5：会 場 名古屋東部丘陵(長久手町・豊田市、瀬戸市)

さて、構築会愛知支部の活動について報告いたします。支部総会兼親睦会を2003年5月12日名古屋クラウンホテルにて開催いたしました。支部総会では、東亜建設工業株式会社名古屋支店長鳥居剛様に、海外工事でのご体験をお話いただきました。特に中近東でのお話に関しては、国内の工事に比べて大きな緊迫感と使命感の中での仕事振りに会員一同耳を傾けていました。

支部総会終了後、懇親会はたいへん和やかな雰囲気で行われました。

なお、支部総会で了承されました今年度の愛知支部役員は以下のとおりです。

支 部 長 英比 勝正 (C72)

副支 部 長 矢野 修一 (C74)

顧 問 今倉 邦彦 (A57) 森下 弘士 (C58)

監 事 格清 哲夫 (A72)

幹 事 長 降旗 達生 (C83)

本年度は、さらに活発に活動したいと考えています。

東海地方にご異動の際には是非お仲間に加わっていただきたいと思います。

【幹事長 降旗 達生(C83)記】

大阪支部だより

今年の夏は、長期予報とは違い、涼しく過ごしやすい気候が続いています。というよりも、梅雨あけが夏休みに食い込んでいますし、早い時期から台風が上陸するし、東北のほうでは1日に3回も大きな地震が起きるなど、いつもと違った年が続いています。

そういえば、我が阪神タイガースも早々とマジックが点灯と、大騒ぎの大坂です。

当支部は、今年度、大阪市が事務局を担当することになりましたが、春元大阪支部長が局長を務める大阪市建設局では、今年度から大阪ミナミの道頓堀川を管理することになりました。

大阪ミナミといえば道頓堀。道頓堀といえば戎橋。戎橋といえばタイガース優勝やサッカーワールドカップの際の飛び込みです。道頓堀は今、遊歩道の整備中ですが、戎橋も架け替えを予定しており、デザインコンペを実施中です。

大阪の景気浮上のためにも、タイガース優勝といきたいのですが、飛び込みは頭の痛いところです。

なお、支部総会につきましては、例年9月頃ですが、今年は11月頃に開催する予定です。この構築会だよりが届いている頃には、タイガースの日本シリーズの優勝も決まり？、総会のご案内も差し上げているかと思いますので、皆様とお会いでき、美酒で乾杯できるのを楽しみにしております。



大阪の道頓堀



戎橋

東京支部だより

東京支部では、平成14年11月8日に、土木工学専攻長(当時)の松井保教授による講演会を開催しました。松井教授には同年7月の東京支部総会・懇親会の当日に講演いただく予定でしたが、台風の影響で止むを得ず欠席されたため、日を改めて講演いただいたものです。

松井教授には「これから土木教育～学校教育と技術者教育～」と題して約1時間30分に渡りお話をいただきました。当日は急な呼びかけにも拘らず、29名の方々に参加いただき、盛況の内に講演会は無事終了しました。

（マーチャンティリティストを取る）講演。講演はヨーロッパ、日本、中国など世界中の多くの研究者や実業家によるものでした。

【追伸】

- ①平成15年度の東京支部総会が諸般の事情で秋に開催のため、新役員は稿を改めて報告します。
- ②東京支部では、連絡手続き合理化などのため、会員の皆様の連絡先のmailアドレスのデータベース化を図っています。平成14年度の支部総会案内への返信にアドレスを記入いただいた方から登録を始めています。未登録の方は、是非東京支部幹事長宛て(otatet@kajima.com)にアドレスの連絡をお願いいたします。



松井保教授の講演



講演会 会場風景

兵庫支部だより

支部活動の14年度報告と15年度予定から

平成15年度から、当支部幹事長を拝命しております田谷孝壽です。前任の本井敏雄氏から引継ぎを受け身に余る大役に恐縮しております。皆様の暖かいご支援を得て大過なくやりとげたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

さて、前幹事長を中心に皆様のご協力による14年度の支部活動の内、主なものを次にご紹介します。見学会と総会及び懇親会については、11月8日金曜日の午後に行いました。

見学会としては、神戸東部新都心(HAT神戸)の兵庫県立 阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」及び(株)神戸製鋼所、神戸発電所(都市型火力発電所)を訪れ、参加者38名それぞれ興味ある2時間余りを過ごしました。

「人と防災未来センター」は、阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献するために平成14年4月にオープンした施設です。

センター内では、大震災の発生直後から復興が進む現在までの姿を、迫力ある映像や被害者などから提供された貴重な資料で伝えています。また、防災に関する総合的・実践的な人材育成や、災害発生時には災害対応の専門家を被害地への派遣等に取り組んでいます。

(株)神戸製鋼所では、全員のヘルメットや作業服の用意、神戸発電所(都市型火力発電所)についてプロジェクト、資料による説明、また発電設備の案内等、当支部幹事の園田氏(A78)、富岡氏(A80)はじめ当社社員による細やかなお心遣いをいただきました。「地域と共生する都市型発電所」をテーマに、地域のライフルライン確立、地域へのエネルギー供給などの期待を担って建設され、2号機も2004年に完成予定のことです。

総会は、造り酒屋地域で有名な灘五郷の一角にある「神戸酒心館」ホールで行いました。出席者は36名で、13年度の報告・決算、14年度の予算及び役員改選などを行いました。

午後の1時からの行動で、総会が終わる頃にはみんな、のどが渴いていました。午後6時から、待ちきれない雰囲気の中で「酒心館さかばやし」で懇親会を始めました。西村宣男土木工学専攻長代理、大野義照建築工学専攻長、山村勝保構築会会长も駆けつけて頂き、蔵出しのお酒に舌づみを打ちながら、にぎやかに懇親いたしました。

14年度報告は以上ですが、15年度の主な活動としては、秋に見学会と総会及び懇親を予定しており、最近新聞にも紹介された来春完成の「実大三次元震動破壊実験施設」等を見学先候補に考えており、今後、幹事会を中心に調整を図ってご案内します。また、ご新人の加入を心よりお待ちしております。

支部長	岸田 威 (C66)		
副支部長	西田 泰悟 (A68)		
監 事	佐俣 千載 (C71)	橋本 彰 (A72)	
幹事長	田谷 孝壽 (C75)		
顧 問	松浦 勢一 (C53)	王 柏群 (A54)	
	木村 公之 (A59)	入江 恒一 (A62)	
	神田 徹 (C63)	明渡 稔輔 (C65)	
相談役	川谷 充郎 (C72)	道奥 康治 (C77)	
幹 事	亀本 博文 (C65)	山口 征宏 (C69)	
	志波 秀明 (C71)	渡辺 哲男 (C71)	
	村原 健三 (E72)	中山 久憲 (C73)	熊木 隆 (E74)
	田中 均一 (A76)	榎原 敏夫 (C77)	本井 敏雄 (C75)
	桜井 秀憲 (C80)	富岡 洋 (A80)	園田 学 (A78)
	荒谷 一平 (E87)	秋川 宏之 (A88)	大原 良夫 (C79)
			松井 三思呂 (C84)
			細野 一夫 (E84)
			大久保 浩 (E91)
			石原 匠 (A91)



【幹事長 本井 敏雄(C75)記】

広島支部だより

構築会広島支部は、1999年5月に発足し今年で5年目を迎えました。

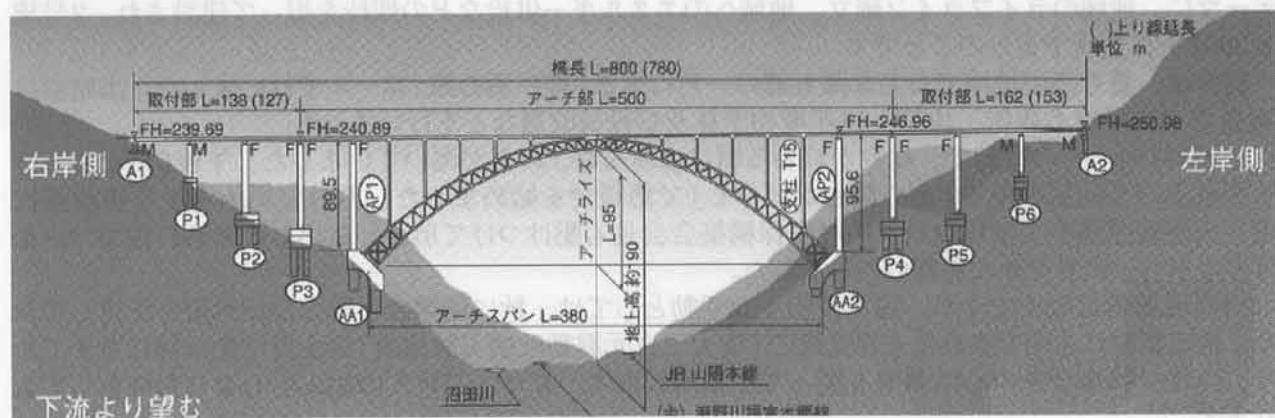
昨年度は広島県殿のご協力により、建設中の「空港大橋(仮称)」の現場見学会を開催しました。

空港大橋(仮称)は、広島中央フライトロードの一部になります。広島中央フライトロードは、地域高規格幹線道路であり、山陽自動車道河内インター及び広島空港と中国横断自動車道尾道松江線とを結ぶ延長30kmの自動車専用道路です。空港大橋が完成すると、橋長800m、アーチスパン380mとなり、日本一のアーチ橋となります。

見学当日は、下部工工事の最盛期で、資材を運搬するインクライン等、普段目につくことのない大型仮設備を間近に見ることができました。そのスケールの大きさに圧倒された会員も多かったことと思います。

建設業界には厳しい状況が続いているが、広島支部会員の親睦を深め、情報交換、意見交換の場として活用しながら、さらに広島支部を発展させていきたいと思っております。

最後になりましたが、他地区より広島地区に転入された方がおられましたら、広島支部役員までご連絡頂けますようお願い致します。



橋脚の施工状況

支部長 中山 隆弘 (C68)

副支部長 芥川 省三 (C74)

幹事長 増田伊知郎 (C80)

監 事 坂手 道明 (C71)

幹 事 蒲原 幹生 (C87)

亀田 陽市 (C90)

小西 英明 (C95)

南 博高 (C95)

久保 充司 (C98)

【幹事長 増田伊知郎(C80)記】

2003年度役員会報告

日 時 : 2003年5月20日(火) 18:00 ~ 19:00

場 所 : 大阪府建築健保会館

協議内容 :

1. 2002年度事業報告

(1) 役員会の開催、(2) 名簿・たよりの発行、(3) 記念品贈呈、(4) 支部活動への補助、(5) 各専攻への事業補助、(6) ホームページの開設、などの本部活動報告、および愛知、大阪、東京、兵庫、広島の各支部活動の報告がなされ、審議の結果全て承認された。

2. 2002年度会計報告

担当幹事より、収入・支出状況の説明と監査結果の報告がなされ、承認された。

3. 構築会会則

土木工学専攻および建築工学専攻の教官から選出される幹事の数について、従来4名であったのを若干名に改訂する案が承認された。これに伴い、2003年度からは3名体制で臨むことが承認された。

4. 2003年度役員選出

新役員に、前田孝男会長、小嶌清伍副会長、山内一浩監事、桐野健治監事、飯田克弘幹事長、荒木進歩幹事、2003年卒の学年委員として蒲原武志氏、藤本正基氏がそれぞれ選出され、また、向井洋一幹事の留任が了承された。

5. 2003年度事業計画案および予算案

新幹事より2003年度の予算案が提示され、審議の結果、増収につながる活動を行うことにより支部援助金および教室寄付金を前年度並みとすること、また今年度の収入が増加しなかった場合には来年度の支部援助金および教室寄付金を今年度より減額することが承認された。その他他の費目については、原案通り承認された。

【2001年度幹事長 多田元英(A80)記】

2002年度会計報告

(平成14年5月1日～平成15年4月30日)

< 収入の部 >

	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
会 費	6,826,800	8,182,500	5,949,500	6,419,300	6,354,270	5,077,520
広 告 料	1,778,270	1,140,000	1,660,000	1,160,000	559,160	718,740
利 息	7,476	3,032	1,974	1,960	1,437,089	5,152
寄 付 金 他	162,561	0	0	0	0	0
単 年 度 小 計	8,775,107	9,325,532	7,611,474	7,581,260	8,350,519	5,801,412
前 年 度 繰 越	7,029,955	6,732,258	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609
収 入 計	15,805,062	16,057,790	15,197,934	14,573,133	15,080,638	14,314,021

< 支出の部 >

	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
名簿印刷費	4,006,118	3,819,400	4,690,713	4,255,587	2,384,130	4,126,710
名簿発送手数料	0	0	0	0	0	0
郵便通信費	1,159,530	1,093,600	131,052	239,074	143,263	170,447
謝金	486,500	334,500	322,000	327,000	390,000	285,000
記念品代	271,845	286,125	197,925	275,100	246,780	243,660
支部援助金	1,498,000	1,543,000	1,584,500	1,577,300	1,658,300	1,823,450
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行事費	0	0	0	0	579,503	0
会合費	152,978	171,880	159,590	193,312	83,795	239,335
出席張費	39,860	39,860	58,860	59,760	59,760	0
慶弔弔費	25,125	76,840	130,530	580	95,602	63,300
備品費	0	0	0	0	0	0
消耗品費	22,968	420	13,141	5,650	13,651	13,604
振替手数料	109,880	139,955	114,750	109,651	11,130	8,820
会費滞納分催促費	0	165,750	0	0	102,115	0
その他の	500,000	0	3,000	0	0	0
支 出 計	9,072,804	8,471,330	8,206,061	7,843,014	6,568,029	7,774,326

	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
残高	6,732,258	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609	6,539,695

< 繰越金内訳 >

	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
定額貯金	3,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000	5,200,000	5,204,990
郵便為替	0	762,770	483,660	83,750	503,140	2,930
郵便貯金	2,141,121	1,640,752	1,850,969	634,774	2,126,325	1,174,118
銀行預金	648,407	1,318,471	848,228	1,992,177	631,755	30,584
現金	143,735	64,467	9,016	219,418	51,389	127,073
合計	6,733,263	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609	6,539,695

2003年度 構築会事業計画

事業項目	実施時期
1. 「構築会だより」の発行・配布	2003年10月頃
2. 記念品の贈呈 (男性: タイピン、女性: ネックレス) 卒業者、新規修了者 卒業10周年、30周年の会員	2004年3月 随時
4. 支部活動への補助 支部活動への補助金交付	随時
5. 土木・建築工学専攻への事業補助	随時
6. 役員会の開催	2003年5月20日
7. 「構築会を考える会」の開催	随時

2003年度 構築会予算

<収入の部>

	2003年度	備考	2002年度	2001年度	2000年度	1999年度	1998年度
会費	5,000,000	前年度会費納入実績に応じて	5,077,520	6,354,270	6,149,300	5,949,500	8,182,500
広告料	550,000	便りのみ発行年度並み	718,740	559,160	1,160,000	1,660,000	1,140,000
利息	2,000		5,152	1,437,089	1,960	1,974	3,032
寄付金他	0		0	0	0	0	0
単年度小計	5,552,000		5,801,412	8,350,519	7,581,260	7,611,474	9,325,532
前年度繰越	6,539,695		8,512,609	6,730,119	6,991,873	7,586,460	6,732,258
収入計	12,091,695		14,314,021	15,080,638	14,573,133	15,197,934	16,057,790

<支出の部>

	2003年度	備考	2002年度	2001年度	2000年度	1999年度	1997年度
名簿印刷費	2,400,000	便りのみ発行年度並み	4,126,710	2,384,130	4,255,587	4,690,713	3,819,400
郵便通信費	150,000	平年並み	170,447	143,263	239,074	131,052	1,093,600
謝金	320,000	平年並み	285,000	390,000	327,000	322,000	334,500
記念品代	250,000	平年並み	243,660	246,780	275,100	197,925	286,125
支部援助金	1,800,000	前年度並み	1,823,450	1,658,300	1,577,300	1,574,500	1,543,000
教室寄付金	800,000	前年度並み	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行事費	0		0	579,503	0	0	0
会合費	240,000	前年度並み	239,335	83,795	193,312	159,590	171,880
出張費	60,000	平年並み	0	59,760	59,760	58,860	39,860
慶弔費	50,000	見込み	63,300	95,602	580	130,530	76,840
備品	0		0	0	0	0	0
消耗品費	20,000	平年並み	13,604	13,651	5,650	13,141	420
振替手数料	10,000	平年並み	8,820	11,130	109,651	114,750	139,955
会費滞納分催促費	0		0	102,115	0	0	165,750
その他	0		0	0	0	3,000	0
小計	6,100,000		7,774,326	6,568,029	7,843,014	8,206,061	8,471,330
予備費	5,991,695		6,539,695	8,512,609	6,730,119	6,991,873	7,586,460
支出計	12,091,695		14,314,021	15,080,638	14,573,133	15,197,934	16,057,790

事務局だより

会員の皆様には、平素から会の運営と発展にひとかたならぬご支援を賜り、事務局一同心よりお礼申しあげます。さて、構築会の事務活動などに関して以下に報告いたします。

1. 名簿の隔年発行

2001年度の役員会において名簿を隔年に発行することが認められたことを受け、昨年度は「名簿」と「たより」の両方を発行しましたので、今年度は、会員からの寄稿文および会員の異動状況を掲載した「たより」のみの発行となります。ご了解のほどお願ひいたします。

2. 財政について

会費の高額滞納者に対し「会員名簿」と「構築会だより」の発送を停止することが2000年度の役員会で議決され、それを受け昨年度は276名の会員への「会員名簿」および「構築会だより」の発送をやむなく停止しました。会則の「会員の親睦を計ることを目的とする」という本会の活動目的にご理解を賜り、財政面でもご協力いただければ幸いに存じます。

3. ホームページの開設

2002年度より、事務局で作成しました構築会のホームページの電子情報を土木工学専攻・建築工学専攻の各管轄のWebサーバー上に転載することが、両専攻のご好意により正式に承認されました。これに伴い、以下のURLより構築会のホームページの内容が閲覧できるようになります。今後は会員の皆様のご要望に添えるようなメニューの追加の可能性も検討してまいりたいと考えております。是非、構築会のホームページを御覧いただき多くのご意見を賜りたくお願い申し上げます。

<http://www.civil.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>

または

<http://www.arch.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>

【2003年度幹事長 飯田克弘(C教)記】